

ある日の保育から

津守 真

S 夫は、朝、門から走って入ってくると、部屋の入口で、「イタカッタ イタカッタ」と私に手を開いて見せた。よく見たがどこも怪我をした様子はない。部屋に入るとまずトランポリンをとぶが、「アブナイ アブナイ」と何度も言う。S 夫は一と月程前に幼稚園部に入ってきたのだが、高い所に上ったり、トランポリンで不安定にとびながら、「アブナイ アブナイ」と言ったのが、印象的だった。そのことばの中に何か本人の危機感を感じて、私はその傍にいたりとき、危なかったけど、落ちないように助けてあげるからね、とことばを添えた。

この朝、S 夫がトランポリンをとんでいる間に、八か月の赤ん坊をいつも胸に抱いて

送ってくる母親が部屋を出ようとした。目ざとくそれを見たS夫はトランポリンをおりて、母親のところに行った。私は、お母さんに手をつないでもらったら、と言うと、母親は優しくS夫を引き寄せ、S夫は二、三秒、母親によりかかって、すぐにまた、トランポリンをとびはじめた。

母親が去った後、S夫は急にホールに走っていった。あとに残された私は、どうしようかと迷ったが、少し間をおいてゆっくりと歩いてホールにいった。S夫はホールのトランポリンの上から私を見ると、嬉しそうに笑って、私の手をとってトランポリンをとびながら、「アブナカッタ アブナカッタ」と言った。しばらくすると、また急に走り去って幼稚部にいった。こうしてホールと幼稚部の部屋の間を何度も往復した。そして私もその笑顔にさそわれて、何度もいったり来たりした。そのときホールで他の子と遊んでいた実習生があとになって話してくれたのだが、S夫は、「クルカナ クルカナ」と言ってそのたびに私を待っていたとのことだった。

こうしてS夫は一日中よく遊ぶのだが、途中でふと「ママは」と言うことがあった。私は、ママはかならずお迎えにくるからねと言うと、元気に遊びはじめた。帰りがけに母親のところにとんでいくと、S夫は「オムカエにこう」と何度もいう。「オムカエ」という場所があつて、そこに赤ん坊と母親とが行っていたとS夫は考えているらしいと母親は

言った。

これから何日も、幼稚部から走り去ってホールにいて私があらわれるのを待つ遊びはくり返された。そして、私の顔をみると、「カエッテキタ」と言つて笑うのである。一度自分が手放したものが自分の手もとに帰ってくるということがこの子のテーマになっていることを私は知った。

丁度、こんな最中に、私は娘の家を久しぶりに訪ねた。生後三か月になった赤ん坊を母親が抱き上げたとき、三歳をすぎた上の子が、「お母さんは、Yちゃん（三か月の妹のこと）のお母さんなの？」とまじめな親で母親を見上げてたずねた。母親はびっくりして赤ん坊をおろして上の子を抱いた。そして赤ん坊は私が見ることになった。五、六月号に記したことの後日談である。三歳の子どもにとっては、これまで自分だけのものだった母親が、あとから来た赤ん坊の母親でもあるということは、すぐには理解しがたいことなのだろう。この子どもは、たまたま、この疑問をことばに表し、大人もすぐに理解できた。しかし、同じ疑問をもった子どもが、赤ん坊の髪の毛を引っ張ったりかみついたりして、それを表現したら、大人がそれを理解できるまでには時間がかかるだろう。

朝、門から入ってきたとき、S夫が「イタカッタ イタカッタ」と手を開いて見せたの

は、もしかしたら転んだのかもしれないが、それ以上に、心が痛かったのだらうと私は思った。それは第二子の出生に伴い、多くの子どもが経験する心の痛みである。S夫はそれをこんなに簡潔に表現してくれている。私は、母親と話し合いながら、子どものもつ表現力にあらためて感心し、その疑問を解くことに力をかしたいと考えた。

(愛育養護学校)

